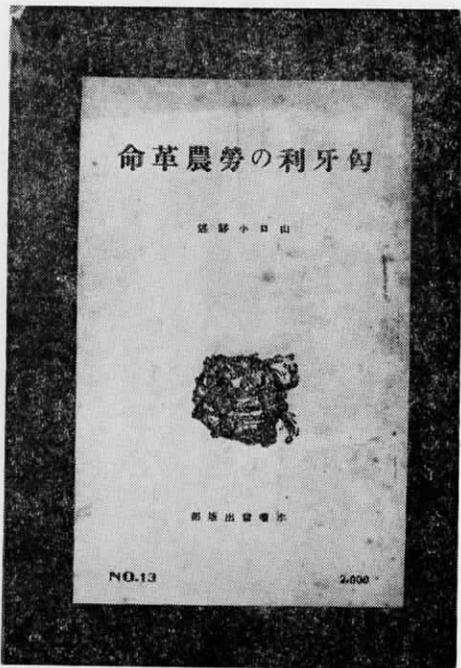


正昭らが、出口栄二を会長とするこの本の編集会に協力していること、とくに上田が全文のリライトにあたったことに注意しておきたい。出口の意図と、これら「進歩的学者」の業績が、この本の完成時点において、すでに教団内部に異端的存在になっていた、という意味においてである。

- 8 宮本正男「北一輝とエスベラント——大本エスベラント運動の源流——」La Tolo 一九六五年七月 福井県エスベラント会。
- 9 『国領五一郎・山本懸威著作集』一九六三年 日本共産党中央委員会出版部。
- 10 橋川文三編 前掲書。
- 11 梅棹忠夫『日本探検』一九六〇年 中央公論社。
- 12 出口王仁三郎『記憶便法エス和作歌辞典』一九二四年 天声社。戦後版は一九七一年 同社。



水曜会のパンフレット『匈牙利の労働革命』（山口小静述」とあり、山川菊栄らの山口についての回想が付いている。

#### 第四章 緑化か赤化か

本大会は世界普遍語と正字法の改正は共同の善事であり、人民の団結と友好をいちじるしく促進するものと考えらる。

第一インタナショナル第二回大会  
(一八六七年九月)

## 「第一次」共産党の人びと——片山潜ほか

いわゆる「第一次」共産党結成について、しばらく徳田球一の言を借りることにする。

「一九二二年の春、近藤栄蔵は上海において朝鮮の共産主義者を通じてコミンタールと接触した結果、日本における共産党準備委員会の活動に直接影響を与えました。この委員会の結成と共に各首領は自身の影響の下にある共産主義分子を糾合して共産主義者グループをこしらえました。主として研究団体の形をもって現われております。東京における堺利彦を中心とするエル・エム会(出版を経営するために別に無産社あり)、山川均・同菊栄を中心とする水曜会、近藤栄蔵・高津正道を中心とする晝民会、橋浦時雄を中心とする時計工組合内のグループ、大阪における荒畑勝三を中心とするエル・エル会等が発生したのであります。……私の属しておいた水曜会について、やや具体的に述べることにします。水曜会は、山川均・同菊栄のほか、西雅雄・同タイ・横田千元・田所輝明・仲宗根源和・山口梅子・私らによって創立されたものですが、漸次労働者分子を吸収、杉浦啓一・金子健太、名古屋における葉山嘉樹・寄田春夫らは労働者分子の精鋭でありました……」<sup>(1)</sup>

徳田球一のこの分類は正確とは言えない。ここでは片山潜の役割が脱落しているし、他のグループ、たとえば平林初之輔・青野季吉・市川正一・市川義雄らの無産階級社などが落ちている。しかし、日本共産党史を目的としていない本稿では、これ以上この問題に立ちいらぬことにして、「第一次」共

産党に結集したエスペランチストの群れを、便宜上この分類にしたがって洗い出していくことにする。

徳田球一 の分類からはずされた片山潜から話を はじめ る。「第一次」共産党の結集には猪股津南雄・近藤栄蔵を先頭に、間庭末吉・鈴木茂三郎・田口運蔵らが、いわば片山系として参加しているのであるが、この中にエスペランチストはいない。問題になるのは、片山その人だけである。

周知のとおり、日本の初期社会主義運動の中で片山は、幸徳秋水らの「激派」に対する「軟派」の筆頭であった。空想的直接行動論の代わりに、議会重視をとなえ、革命的破壊の代わりに、労働者の生活条件の改良を考える、いわば日本の民主社会主義の第一人者であった。そして、ひたすら労働組合運動にとりくんだので、その生活も、幸徳・大杉らに比べると、きわめて地味なものであった。

「築地の本願寺裏の貸席青柳亭で片山君の送別会を開いた時、私はこの労働組合運動の開拓者、社会民主党の創立者の一人が、日本においては運動もできず生活にも困るから米国に行くこと述べたのを見て、私たちのような後輩すら運動の復興再建に躍起となっているのに！ そう思って情なさに涙がこぼれた。大杉は平民新聞のエスペラント欄に当夜の記事を書いて、カマラード片山(同志片山)とせず、シニョロ片山(片山氏)とした。私が『それは少し酷いじゃないか』と抗議すると、彼は『なあにこれで沢山だ』とすましていた」(傍点——原文のまま)

これが若き日の荒畑寒村の目に映じた一九一四年の片山の姿であった。文中のシニョローはシンヨローの誤りで、荒畑自身が宮本にあてた手紙ではまちがわずに正確に書いているから、校正の粗漏

と思われる。ただし、『大杉栄全集』第四巻所収の原文にあたってみると、「当夜の記事」は出ていないで、数行で「片山氏渡米」と書いてあるだけである。

その改良主義者にすぎなかった片山「氏」がロシア革命の影響で思想的転換をとげて、アメリカやメキシコの共産党結成に尽力し、さらにソヴェート同盟へ渡ってコミンテルンの執行委員に変貌していったのはこのあとのことである。片山がコミンテルンの要職にあつたことが、日本の運動のために



Kato Sen-Katayama - Tow. Sen-Katayama.

Kato SEN-KATAYAMA PRI LA LINGUO INTERNACIONA.  
TOW. SEN-KATAYAMA O MEJDUNARODNOM JAZYKE.

Te la nomo di revolucionar laboristi di Japano ne saluta la laboristi mondofrancaj movadoj aspirantaj aboligi la diferencojn internaci per la establi de multa diversa naciinala lingvoj, ed abutanti al unumo di internaciona reprezentanto di omnia landi e rasi.

La lingvoj internaciaj eliminis la naciinala frontierojn linguala e per la lingvoj estas la naciinala limitaco ed izolado di laboristi, ed organizi laborista populo di omnia landi. Bonvenante il kun la organizoj revolucionaraj

От насих революционних работни Япония приветствуе рабоче международни движения, стремящиеся к преодолению различий, разобщающих от существовающих между различными национальными языками, и вступая в единение международными представителями от всех стран и рас.

Международный язык устраняет национальные границы и этим самым ликвидирует узды национальности и изолированности рабочих и усиливает колониальную борьбу всех стран, объединяя их в про-

片山潜「国際語について」(Nia Voyo のコピー)

はたしてプラスになったのか、マイナスを与えただけではないか、ということとは、いろいろと議論の分かれるところであろう。少なくとも、堺・山川・荒畑らがしだいにコミンテルンに批判的になり、労働派なる左翼社会民主主義者、他のことばで言うところと非共産党マルクス主義者の集団を形成していく背後には、「あの

片山のような日より見主義者が」という思いがあったことはおおいがたい事実であらう。「文句があれば、モスクワあたりでヌクヌクとおさまっていないで、日本で運動をやってみろよ」というのが、かれらの本音であったと思われる。

さて、この片山がその当時エスベラントを学んだということが、伊東三郎の『日本エスベラント学事始』に出ている。伊東の記述の多くがそうであるように、このことについても論証を欠いているので、この真偽をたしかめることはできないが、片山がエスベラントについて、ある程度の理解を持っていたことだけは疑いない。

一九五九年か六〇年のはじめ、日本共産党は片山潜生誕一〇〇周年記念事業として、その三巻にわたる著作集の発行を計画した。(この著作集には片山自身が行なった社会ファシズム排撃の演説などは用心深く除外されている)そしてまずその著訳書のリストを『前衛』誌上に発表した。その中に「国際語について」という文章を『ナーシュ・プティ』『われらの道』に書いた、とあった。われわれはこれに注目したが、いづれ著作集に発表されるであらうと考えていたのだが、編集者の方では、この原文が入手できないとあって、エスベランチストで、当時党籍のあった坂井松太郎に入手かたを依頼してきた。そこで坂井はソ同盟のエスベランチストと協力して、やっと調べあげて、モスクワ中央図書館に保管されていたイード(エスベラントを「改良」したと称する国際語で、この当時は多少の勢力を持っていた)の雑誌 Nia Voyo 『われらの道』——『ナーシュ・プティ』のコピーを入手したが、ときすでに遅く、著作集の方は完結していた。そこで、その翌年、六一年十一月五日、つまり片山潜没後二八周年の日の『アカハタ』に発表した。

「言語の多様性から生じる困難にうちかち、あらゆる国々へのプロレタリアートと諸種族(マツ)の統一のためになされている国際語運動に、日本の革命的労働者の名においてあいさつを送ります」云々というのである。

もちろん、片山はここで、エスベラントとイードの言語構造の差、両者の運動の本質的な差、つまり、エスベラントの民主的大衆運動をねらっているのに対するイードの少数幹部の意志が大衆の意志に優先するという形態の差などを知っていない。「ウン、国際語か、そりゃ良いことだ」というぐらいで書いたものと思う。一九二七年四月四日のことで、イードとロシア語の対訳になっている。日本では例えば小林多喜二の小説にも書かれた共産党の一斉検挙、三・一五事件の前年であり、来たるべき日本革命の性質を「ブルジョア民主主義革命」と規定し、工場細胞を基礎とする大衆的前衛党への再組織を指示した二七年テーゼがコミンテルンから発表されて、渡辺政之輔を中心に全国的規模での党大衆化がはじまる三か月前のこと、エスベラント運動の迫害者、スターリンの権力がまだそれほど大きくなくて、かれがプーリンと併称されていた時代である。

日本共産党の初代委員長堺利彦とエスベラントの関連については、すでに第一章で述べた。多くの社会運動史研究者や文学史研究者の間で神話化している「黒板勝美・大杉栄ら日本エスベラント協会創立」というのが、いささか穩当を欠いていることも既述のとおりで、むしろ大杉と堺を入れかえるべきである。一九〇六年六月十二日の協会創立の総会に堺は出席していないが、すでにその時評議員のひとりに選出されていた。

『万朝報』を退社、『平民新聞』を創刊、それに「帝国主義戦争反対の叫びの中で死ぬことを本望とする」という社会大衆党大会での演説のときなど、きわめて数少ない場面を除くと、堺の生涯は、幸徳・大杉などに比べて、はるかに地味なものであって、片山潜と似たところがある。エスペラントもコツコツ派であって、大杉のように「一犯一語」とか、三か月の学習で他人に教えるような派手なこととはやらなかったらしい。

共産党結成以来、無産大衆党・日本大衆党・東京無産党・全国労農大衆党とたどる「日本型社会主義」の系統の中であって、総参謀長をつとめる山川均の上にある象徴的存在の堺であった。そのかれも一九〇八年六月二十二日、山口孤剣出獄歓迎会のあと、「無政府」「共産」の赤旗をかかかってデモをやろうとして、警官隊と衝突し、堺・大杉ら一五名が検挙された赤旗事件以後は、エスペラント運動からも遠ざかっている。

これは堺だけについて言うべきではなからうが、注意すべきことは、堺を中心とする「第一次」共産黨員の間に、多くのエスペランチスト、あるいはエスペラントの同情者がいたことである。これが今日の、現実主義者の多い、いや、多すぎる共産党との大きな格差である。

共産党委員長堺の秘書を勤めたという仲宗根源和は沖繩生まれのエスペランチスト。近藤栄蔵がデッチあげた「暁民共産党」なる怪しげな団体に夫妻で参加、検挙。その後の「第一次」共産党事件にも連座。二四年の解党のあとに残されたビューローが再建にとりかかり、その手はじめに一九二五年八月に『無産者新聞』を合法的機関紙として創刊すると、その初代の編集兼発行名義人となり、妻貞

代と共に同社で働いた。そのうちにこの新聞の正体がハッキリしてきて、中心をなすものが徳田球一であり市川正一であり、佐野学や是枝恭二であって、自分たちがコミニスト・グループから疎外されていることがわかってくると、同社をやめ、やがては運動から離脱していった。その後、新聞記者になったり、いろんな仕事をしていたもようである。そして故郷沖繩で戦争を迎えた。宮本の知人である某教授の話によると、この人は一時期、仲宗根と屋嘉村の収容所で顔を合わせていた。伊東三郎のもとで農民運動に従事したことのあるこの教授にエスペラントのことを聞かれた仲宗根は「今でもインテルナツィオ（インタナショナル）の歌だけはおぼえている」と言ったという。ここらあたり、酔えばエスペラントでこの歌を歌うという吉村公三郎、世界各国語のインタナショナルを集めている山本嘉次郎の両映画人にいささか似ている。民間人として収容所を早く出た仲宗根は、「琉球独立論」をとらえてアメリカの支配者を喜ばせていたが、一九七二年のことだったか、本部半島開発の功労者として、ナンとかいう勲章を政府からもらった、という記事が新聞に出た。

しかし仲宗根は入獄中にエスペラントを熱心に学び、ポーランドの長編歴史小説『ファラオ』（映画「太陽の子」の原作）の解説を日本エスペラント学会の機関紙にペンネームで書いている。

「暁民共産党」事件に連座し、その後の共産党でも活動した、もう少し首尾一貫した人に高津正道がある。共産党内では「暁民会セクト」として、対立した徳田球一らの水曜会系と共に、相当物議をかもしているのであるが、高津は一九一九年ごろからエスペラントを学びはじめ、早大在学時代はきわめて熱心で、日本へ来たロシアの盲人エスペランチスト、エロシエンコの思想的転回に大きな役割

を演じたという。高津のエスペラント運動についても、わたしたちはくわしく知らない。わずかに、一九一九年ごろ、小坂猶二おさか ゆぢの家で催されていた日本エスペラント協会の水曜例会に、のちの東京高裁検事堀真道、のちの京城大学教授長谷川理衛、のちの大阪外大教授川崎直一らと共に、常連として出席していた、ということと、高杉一郎の詳細をきわめた研究『盲目の詩人エロシエンコ』の中で活動していることぐらいである。

「第一次」共産党検挙にさいして、辻井民之助・山本懸蔵・佐野学らと共に、いち早くソヴェート同盟へ脱走したり、労農派に加わって、政治・文化の諸方面で活動した。戦後、社会党代議士として衆議院副議長になったことなどは、まだ人びとの記憶に残っている。一九七三年春の叙勲には、断固、天皇の勲章をはねつけたが、七四年一月死亡した。

## 水平社のエスペランティストたち

徳球式分類法にしたがって、堺の系列に入れるべきか、荒畑派に入れるべきか、それとも佐野学派でも作るべきか、ハタと困るのが、水平社の人びとである。

いわゆる山川四天王、つまり田所輝明・西雅雄・上田茂樹・高橋貞樹らのうち、その師の期待を裏切って国家社会主義に転落した田所を除いて、他の三人は共産党関係で警察や刑務所のごやっかいになって死ぬわけであるが、この中でエスペラントを学んだと言われるのは高橋貞樹だけである。<sup>(3)</sup>

山川のもとを離れた高橋は、堺の船松町ふねまつ（現、耳原町）に移ってきて、水平社運動に従事、松田喜一・木村京太郎・中村甚哉らと協力、水平社青年同盟・無産青年同盟を経て、水平社無産者同盟を代表して無産政党組織準備委員会で奮闘、そのかたわら不朽の名著『特殊部落一千年史』<sup>(4)</sup>を書いた。こういう多忙中での学習らしいから、どの程度までエスペラントをモノにしたかは、いささか疑問である。今でも復刻に価するもうひとつの著書『日本プロレタリアートの諸問題』<sup>(5)</sup>の中には、労働者教育のカリキュラムの案などが見えるが、この中にエスペラント教育ははいっていない。もちろん、この案はコミンテルンかプロフィンテルンのそれに基づくものであろうから、エスペラント教育がなくても当然である。また、うろおぼえて書くべきではなからうが、昔の『前衛』『社会主義研究』などにこの人が書いた中にも、エスペラントに触れたものはなかったと思う。

共産党、あるいは山川均の指令を受けて、水平社を共産党の方向へひっぱるべく、身分をいつわって部落解放運動の中へ潜入した、とアナキストから攻撃され（弁護側は、この攻撃の裏に警察との協力をみてとった）、水平社から追われたが、このとき高橋はすでにモスクワにいた。福本イズムと呼ばれた左翼日より見主義の克服のために大奮闘、三・一五のあと帰国、一九二九年の四・一六で検挙されるまで党中央部補佐として理論面で活動、また共産青年同盟の指導にあたった。この間の事情については、かれを主人公とした立野信之の小説『潰滅』がある。統一公判では農業問題を代表陳述したが、佐野学・鍋山貞親につづいて転向、一番の懲役一五年が七年になり服役中、病勢が悪化して一九三五年に執行停止、十一月二日死亡した。

「人の世に熱あれ、人間に光あれ」と、一九二二年三月三日、京都岡崎公会堂で開かれた全国水平社創立大会は宣言した。水平社は人間を差別する不合理と残虐、それを生み出した社会的矛盾の根絶を求めて立ち上がった運動で、今日の部落解放同盟の前身である。駒井喜作の朗読するこの宣言で「公衆は声を飲み、すすり泣きの声四方に起こり、悲痛なる涙と歓喜との間に創立大会は終わった」と高橋貞樹はその『特殊部落一千年史』に書いているが、この宣言の起草者西光万吉、その同志阪本清一郎・駒井喜作の三人がそろってエスベランチストであったことは、わが日本の反体制的エスベラント運動の中でもっとも誇るべきことであろう。言語帝国主義との闘争は、水平社運動の精神と完全に一致する、というのが、かれらの考えであった。

西光万吉は一八九五年、奈良県掖上村柏原かしはらの西光寺の住職、清原道隆の長男として生まれた。清原一隆というのがその本名。西光と阪本はすでに「第一次」共産党のときに入党していたという。<sup>6)</sup>荒畑寒村を関西地方オルグとしていたこの党にかれらを結びつけたのは、高橋貞樹か、それとも堺利彦と因縁深く、共産青年同盟再建の中心人物のひとりであり、同時に松本清張の『昭和史発掘』の三・一五の項に「大阪のK」として出てくるスパイ容疑者岸野重春か。岸野は関西の左翼の中心人物のひとり、「第一次」以来の黨員である。この人の手から党の機密がその筋の手に渡ったり、福本和夫や袴田里見が売られたのだというのが、ほぼ定説になっている。西光らを入党させたのが荒畑自身ではなさそうに思える。というのは、荒畑の著『寒村自伝』に水平社運動のことが全然出てこないからである。

西光自身は、水平社を創立して一段落すると、今度は農民運動に転進した。部落解放は労働者農民との協力がなくては行なわれない、という見地からであろう。一九二二年四月、神戸で創立された日本農民組合では、杉山元治郎・賀川豊彦・仁科雄一らと共に中央委員になっている。三・一五の直前に共産党に復党、総選挙には表面的には労働農民党、実は共産党の公認候補として奈良県から立候補、落選した。三・一五で懲役五年、獄中で転向。出獄後は橋本欣五郎大佐の組織した大日本青年党に参加するなどした。

同じく農民組合運動家で三重県から総選挙に立候補、同じく落選したエスベランチストの河合秀夫は、「晩年の西光さんは見ておられない」と語っていたが、古い仲間の間にあつては、転向しようとなにしようと、西光万吉はどこへ行っても「西光さん」であつて、「背教者西光」ときめつけられなかった。これはひとえに西光の過去の仕事と、その人格のせいであろう。

三・一五事件の大阪の被告団の中に、過去と将来の作家が三人含まれていた。将来の作家島木健作（本名朝倉菊雄）はあまりにも有名である。もうひとり村雨退一郎（本名坂本俊一郎）で、それぞれ香川・鳥取の農民組合書記であり、かつての作家である中央委員西光万吉にとつては後輩にあたるわけだ。最近、木村京太郎らの手で『西光万吉著作集』全三巻ができたが、その中に数編の文芸作品がある。濃い仏教思想と虚無思想がないあわされたもので、きわめてユニークな作品である。三・一五で比較的早くジャバに出た島木は、三宅右市（神戸の三・一五の被告）と千石竜一（大阪の三・一五の被告）をチャンポンにモデルにした『癩』や、河合悦三（元中央委員）らしき人物を書いた『第一義の道』、宮井進一（大阪の三・一五の被告）とその妻清香（これもエスベランチスト）をモデルにした『再建』を書き、自らも病軀をおして運動の一翼に加わろうとしたが、五年の実刑を受けた西光は、軍国主義の波にお

おいつくされた世界へ出てきた。西光がついに大作家になれず、大画家になれず、大脚本家にもなれなかったのは、ひとえに時代のせいであろう。弁明にならぬ弁明を故人の代わりに。

西光は和歌山県の打田という部落で敗戦を迎えた。戦後、この地で文化運動をやったわけであるが、その中であって、自作の詩をエスペラントに訳し、それに楽譜をつけて部落農民の間へ持ちこんだことがある。それを何かの会合で婦人たちに歌ってもらおうとして、大いにけいこさせておいたのだが、本番になって、当の出演者たちが、「舌の回りぬマドロコしさ」から勝手に日本語の方を歌ってしまったとか。この悲喜劇が、西光の、社会主義の、エスペラントの、文化運動の真の姿かも知れぬ。

このほか、西光は「自衛隊を廃して国際親和の和栄隊に再組織せよ」となえて、そのためのパンフレットを二、三冊書いた。そのひとつにエスペラント訳と英語訳があり、もうひとつにはエスペラントのサブタイトルがついている。

部落解放運動の中で、この他にも近藤光・平野小剣・人見亨らがエスペラントを活用しようとした記録や思い出話が残っているが、いずれも実を結ばず、その試行だけに終わっている。理想と現実の前に悩み、おのれが本来適切であると思う分野の仕事をかたくりすて、みすみす自らも不適任だと思ふ死地へ飛びこんでゆかねばならなかった青年の悲劇は、もはや現在の社会では見られない、と言いつける勇気を持つ者がいるだろうか。西光の挫折(ざつたつ)をあざ笑うことのできる人間は、しあわせである。住井すゑの小説『橋のない川』はついにその主人公のひとり村上(西光がモデル)の最後まで書くことができなかった。

## 山川均とその周辺

山川均の名は、協会の機関誌 *Japan Esperantisto* (『日本エスペランティスト』第一巻第二号(一九〇六年九月)に、会員番号一九二号、山中均 岡山市紙屋町 林方として、その盟友、不敬罪の共犯であった守田有秋(会員番号二五五号、東京市神田区通新石町二六新聞社)、もうひとりの盟友浜田仁左衛門(会員番号二四四号、大隅国蛤良郡国分村小川二二六)と共に出てくる。この山中が山川の誤植であることは、山川その人の自伝に「義兄の経営する林業種店で働いた」とあるから、まずまちがいはない。しかし、山川がエスペラントをどれだけ学んだかについては、若干の疑問が残っている。不敬罪の入獄から仮出所して、しばらく郷里で鳴りをひそめていた間の「悲しき玩具」であったのだろうか。故小坂猪二は「山川夫妻はエスペラントに好意的ではなかった」と語っていた。もっとも、小坂の話自体にも疑わしい点があり、全面的に信頼することはできないが。「荒畑などは尾行を連れたまま協会事務所へよく来た」というのがそれで、げんに川崎直一は、それを真に受けて、*Enciklopedio de Esperanto* (『エスペラント百科事典』)に「堺・大杉・荒畑などがエスペラントに関心を示した」と書いているが、荒畑自身が宮本の質問に答えて、そうした事実をはっきり否定している始末である。

しかし、均の先妻の大須賀サト(里子)はエスペラントを学んでいた。ブルインというオランダ人が、たんねんに『国際社会評論』を調べて、ふたりの日本人読者、エイ・オスギとサト・オスガを洗

い出している。<sup>(9)</sup>これが大杉栄と大須賀サトであることはまちがいない。そして大須賀は、この点において、あえて婦人といわず、日本のエスペランティストで社会主義とエスペラントを国際的視野で進めようとした先駆者の名譽を持つものである。たとえ大杉ほどでないにしても。

残念ながら、大須賀についてのまとまった研究はまだ出ていない。わかっていることは、かの女が初期社会主義運動の中でもっとも活発に動いたひとりであること、つまり、大杉の妻堀保子、堺の妻為子などのように「内助の功」があったのではなく、自ら先頭に立って働いた数少ない婦人のひとりであったこと、いわゆる「赤旗事件」の被告として法廷にひきずり出されたこと、つまり、後年、日本最初の婦人テロリストを志した菅野スガの同志であったことだけである。山川が自伝の筆をほかした部分を、むりに解釈すると、この事件で均が入獄中に、懲役一年、五年間執行猶予になったサトは、他に愛人を作り、妊娠したりして、均の出獄後、多少のいざこざがあり、一九一〇年に倉敷で均に看護されて死んだものらしい。

### クララ会と佐々城松栄

こうした中で、山川の関係者のなから本当の意味でのエスペランティスト、つまりエスペラントで読み、聞き、しゃべるだけではなく、書くこともできる人が出た。エスペラントによる著作や組織活動を通じて、相当な影響を他に与えた人、菊栄の姉森田松栄、結婚して佐々城松栄と名のつた人がそ

れである。

松栄の夫、佐々城佑からはじめなければならないが、現存の人なので書きにくいが、あえて書くとかれの原籍は北海道室蘭郡室蘭町大字絵鞆村留別、母は日本婦人運動の先駆者佐々城豊寿<sup>(10)</sup>。佑は、一八八三年三月三十日生まれ。「自分は兄弟なし、姉妹各一人あるのみにて、姉は長崎県佐世保天馬町二十番地に旅宿を開業しおる武井勘三郎の妻となりおり、妹はその姉の家に養われおれり」とは、アメリカから帰国して、直ちに官憲に取調べられたときの佑の答えであるが、この姉こそは有島武郎の小説『或る女』のモデルで、国木田独歩の愛人であった人、信子である。佑は「明治三十(一八九七)年九月京都市同志社中学部より札幌中学校に転校、同三十四(一九〇二)年四月卒業、直ちに上京の



上、渡米、四十(一九〇七)年十二月帰国せり。在米中、北米合衆国オーケランド・ハイスクールにおいて修学のかたわら、実業に従事せり<sup>(11)</sup>と云うが、「在米日本人社会主義者無政府主義者関係名簿」によると、松栄一九〇七年に真先に「要視察人として個人名簿に記録された」三名のうちのひとりであった。「陸仁君足下に与う」というのちの幸徳事件デッチ上げの伏線のひとつになった天皇への公開状を日本大使館前にはり

つけた社会革命党の本部委員、岩佐作太郎以下三一名の中のひとりであった。<sup>(13)</sup> もっとも、この社会革命党なるものの組織がどの程度であったかは、相当疑問のあるところで、単なるハネ上がり口の舌の徒の小集団であったと思われるが、とにかく、その本部委員として佑の名が出ていて、帰国当時は厳重な監視下におかれ、その往復文書さえことごとく当局の手で盗読されて、秘密報告のたねにされていたが、「四十三(一九一〇)年一月英語科教員検定試験を受け合格」、佐賀市私立竜谷中学校の教員として「月俸四十円を受け、生計中等」「英語に熟達」<sup>(14)</sup> して、「キリスト教信者にして深くこれを信ず」と報告されている。<sup>(15)</sup> 帰国後、にわかにその生活や思想を改めたもようである。一九一三年十月十七日には、その名がブラックリストから削除されている。<sup>(16)</sup>

佑がエスペラントを学んだのはアメリカ時代であって、帰国後すぐに日本エスペラント協会に入会している。森田松栄と、いつ、どこで、どうして知りあって、結婚するようになったかは知らないが、やはりエスペラントとキリスト教がとりもった縁であることだけは確実である。

ここで私たちはふしぎな事実につづかるのである。菊栄の『女二代の記』<sup>(17)</sup>も、均の『ある凡人の記録』、それをも収録した『山川均自伝』<sup>(18)</sup>の中にも、佐々城佑についての記述が一行もない。菊栄のごときは、幼年時代からの松栄について、たくさんのエピソードをあげて書いているのであるが、その結婚、その夫については、名さえもあげていない。これには何かの事情が伏在しているもようである。帰国後、日本の現実の前に簡単に屈服して転向した佑を俗物視していたのか、その行動や性格の中に問題があったのか、それとも、相当の年になってから、こうした男と結婚した松栄が気に食わなかったのか、いずれにせよ、奇怪千万なことである。『山川均全集』が未完の今日、断言することはば

かるが、筆者のみた範囲では山川夫妻が佑に言及したものは皆無である。わずかに、ふたりの長男、振作(これはエスペランティスト)が編さんした年表の中に、「一八八六年、竜之助、千世の第一子として森田(のち佐々城)松栄誕生」として、伯母のことをしるしたのと、向坂逸郎・山川菊栄共編の『山川均自伝』巻末の「年譜」の中に、『資本主義のからくり』の訳者としての佐々城松栄が記されているのが、山川一家によって語られる「佐々城」のすべてである。

松栄は一九二五年、東京で婦人エスペランティストの組織「クララ会」を作った。このころ、松栄はすでにキリスト教から脱皮していたらしい。それ以前にはキリスト教関係の何とかいうパンフレットを森田松栄の名で翻訳しているのであるが、クララ会という名称は、表面的にはザメンホフの夫人クララの名をとったものであるが、同時にそれはドイツ共産党やコミンテルンの創立者のひとり、クララ・ツェトキンの名を下敷にしていた。この会員の中に、のちの日本社会党委員長鈴木茂三郎の夫人になった人や、国策研究会や財界団体を作ったりして、いまは台湾ロビーの有力者である矢次一夫の夫人になった人などがいた。

このクララ会は、一九三三年の松栄の急死で大きな打撃を受けるのであるが、それでも一九三六年、反動の嵐がいよいよ強くなり、山川夫妻が鎌倉に引退してウズラ飼いはじめた年の四月、日本エスペラント婦人連盟を作るということで、発展的解消を上げてしまうまで存在していた。そして、この婦人連盟自身がほとんど何の足跡も残さず消えてしまうことによって、今さらながら、クララ会における松栄の占めていた比重の大きさを示したのであった。

松栄自身は、初期には荻原井泉水や吉田絃二郎の短文を訳していたが、しだいに社会主義へ近づい

ていった。もつとも、それは妹菊栄の関係する労農派的社会主義であった。山川均の啓蒙書として名高い『資本主義のからくり』のエスペラントへの全訳をしたり、菊栄の『国際婦人デー』を訳してサートの機関紙 *Sennaculo* (『無民族者』) に発表したりした。クララ会もしたいに左翼的傾向を示し、日本エスペラント学会内の良心的な人びと、松崎克巳や東宮豊達らの協力を得ていたと言う。

松栄が死んだのは一九三三年六月である。佑が西式健康法を盲信して、それを松栄に強いたための早死だ、と菊栄が憤慨して、この健康法の創始者西勝造を告訴する、と息まいたという話が伝わっている。

クララ会が編集した松栄の遺稿集を、母の千世が出資して発行した *Verkoj de Macue Sasaki* (『佐々城松栄遺稿集』) は、今は稀覯本のひとつである。

松栄がクララ会創立にさいして書いたアピールの中で、激賞されている婦人エスペランチストがふたりある。そのひとりが三宅ヒサノという印刷労働者であった。評議会関東出版労働組合に属する現役の印刷工、しかもエスペラントでしゃべらせても堂々たる雄弁家だったので、青白きインテリ集団であるエスペラント界にあっては、すこぶる異彩を放ったものである。国際的にもサートの雑誌に写真入りでかの女の文章がのせられた。丹野セツ・田中ウタ・中平ハギら関東地方評議会の婦人闘士、久津見房子・小見山富恵・山上鈴子ら関西の左翼闘士といえども、しよせん日本語でしかしゃべれないのである。婦人が人前に出て演説するだけでも、すでに異常と思われた時代に、現場の労働者でエスペラントで雄弁をふるうとあって、それこそ隅にもおけぬ存在であった。そして労働運動家として

は、春日庄次郎・中尾勝男らが作りあげた関東出版の牙城とたのむ共同印刷分会の婦人部長であった。徳永直の小説『太陽のない街』に出てくる大宅婦人部長は、この三宅ヒサノをモデルにしたもので、婦人部の総会でキンキン声をあげて、主人公のひとり高枝と論争し、争議の妥結をはかるという役割を演じている。その後の三宅の行動を考えると、たぶんこれは事実である。著者の徳永自身が「ダラ幹」派に属していて、小説の主人公萩村とは似ても似つかぬ存在であったことを、この小説は書き落としているのである。もっとも「ダラ幹」と言い、「軟派」と呼ばれるもの、かならずしも「裏切り者」ではない。よりよく情勢を見ており、いっそう妥協的で、ストライキを日常利害の問題という点でとらえていて、革命の予行演習などと考えなかったというだけで、評議会やその後身、全国協議会(全協)の主流のような玉碎的争議戦術を避けようとしたので、それが歴史の示すように、初期には「レフト」と呼ばれるプロフィンテルン加盟者の非公然グループ、後には党フラクや細胞の方針と激突し、しだいに右翼的方向へ定着していった、というまでの話で、一面的に「裏切り者」の烙印をおすのは誤りである。

共同印刷のストライキ敗北後、三宅の姿は労働運動界から消えたもようである。その活動はエスペラント界だけに限られていたらしい。一九三二年六月十九日、共産党系の日本プロレタリア文化連盟に對抗して結成された労農文化同盟に、三宅ヒサノの名が現われる。梶弘和を中心として組織されたという労農エスペラント同盟準備会を草野丈という人物とふたりで代表しているのである。<sup>(20)</sup> この労農文化同盟なるものは、労農エス同盟同様、単に対抗的に組織されたままで、その実体は文学関係を除くと皆無であったと思われる。また、草野丈なる人物の正体も不明である。他の文献では、労農エス同盟を

代表して、梶弘和・永井叔ながいよの名をあげているのもある。それでも労農文化同盟の執行委員のうちには、田原春次（スポーツ）・高津正道（反宗教）・永井叔（音楽）らのエスペランチストの名があげられていることだけは、頭に入れておいてよいことだ。梶に問合わせてみたが、この同盟のことはほとんど忘れてしまったと言ひ、草野なる人物も知らぬとの話である。

そして、三宅の姿は戦争の激化とともにエスペラント界からも消えてしまう。かの女がふたたび現われたのは、一九六五年、ちょうど東京で世界エスペラント大会が開かれたころ、この大会の事務局にいた福田正男が会ったというのである。このとき、三宅は霊友会かなにかの新興宗教団体の中堅幹部であったとか。

### つぼみ落つ——山口小静

卑小化された「実践」の名で、本来の意味での「実践」、とくに研究活動や文化活動を締め殺すことが絶えず行なわれている。社会主義運動とエスペラント運動、本来対立すべきものではないはずの、この二つがぶつかり、ともすれば対立的になるのが、この国での、いや、全世界的な現象である。弁証法的統一などとなえてみても、しょせん空念仏に終わる場合が多い。他の文化運動の分野、芸術・科学のいたるところで見られるところである。野呂栄太郎・小林多喜二・河上肇の悲壯劇だけがすべてではない。日本全国のいたるところに、小野呂・小小林・小河上が満ちみちていた。少しでも

本を読もうとすれば、たちまち「ブチブル化」や「インテリ化」を批判され、「ビラまき三年、ガリ八年」（本当は三年どころか、半年とつづかぬ活動であった）の「実践」にひっぱり出され、あるいは出て行かざるをえなかった。その結果は——『獄中十八年』の著者たちが、そろって労働者ではなかった、という一事が象徴している。全国の刑務所や予防拘禁所に残されていた非転向者の中で、「小学校卒」の学歴の者は、リョウリョウとしたもので、山辺健太郎・椎野悦郎（両方ともエスペラントを少ししかじった）・青柿善一郎などは例外中の例外であった。

この問題をきわめて卒直に提起したのが、佐々城のクララ会創立宣言の中で、三宅と並んで推賞されている山口小静であった。

「赤化と緑化とは、私の考える所では同時に行なわれるべきものである。世界の大部分は必ず近き未来において、それを同時に成功せしめるにちがいない。しかしながら今日の場合、そのいずれが主であり、かつ先であるかを問う人があるならば、私はちゅうちょなく、赤化が主であり先であって、緑化はむしろ従である後であると答へざるを得ない。なぜならば、赤化なくして、はたして徹底的緑化が行なわれ得るであろうか。また緑化のみによって真の世界平和がはたしてもたらされるものであろうか、ということを私は深く疑わずにはいられないからである。

私は、ことに台湾の民衆にむかってそれを説くにつごうのよい好適例をにぎっている。私は最近、台湾当局の某高等刑事とエスペラントについて二三問答する機会を持った。彼は一般台湾人の間にエスペラントが普及されることについて当局はこれをいかなる目で見ているか、という私の間に對して次のごとく答えた。『一般に内地人がこれをやる場合と、台湾人がやる場合とは、かなり違

った意味に解さなければならぬ。たとえば、手紙の端にでも一九二二年と書かれている場合、その筆者がもし内地人ならば単に世界共通の年号としてこれを使用したにすぎないが、同じことが台湾人によって書かれた場合には、それは単にそれだけの意味ではなくて、明らかに日本に敵存せる大正十一年という年号を無視し、かつ排斥する心と見なければならぬ。同様に、同じくエスベラントを学習するにしても、内地人の場合には、単に世界の共通国際語として、来たるべき人類平和の象徴語として、あるいは国語愛重の手段として、これを選んだものであることを疑われないが、台湾人の場合には大いに事情が違ってくるのである。彼らは単に世界の一民としてこの世界語をやるのではなくて、一方に日本語排斥の意味を十分に含ませてあるのである。しかして言語と思想との関係は密接であるから、日本語排斥はすなわち日本そのものの排斥でなければならぬ。日本の植民政策は断じてかかる反逆者を黙許することはできない。』

私はこの驚くべき僻見付会説が、単にこの一介の青年刑事の頭脳によってのみ製せられていないことを推断するに苦しまない。

これが台湾における日本の為政者の態度であり精神である。有望なる新進学士として上官の囑望を一身に負うているという彼の言動は、私をして当局の態度精神を悟らせるに十分なものがあつたからである。

これを一読せられた本島人諸君は何と考えられるであろうか。赤化か緑化か。たとえ緑化のみによって進まれようとしても、すでにこれだけの執りようなる僻見迷言と戦わなければならぬのである。その戦争は何であるか？ 諸君は単なる民族の戦争を闘われる前に、ぜひともこの不公平なる

迫害、圧迫の手を脱しなければならぬ。すべての迫害せられた者のふり立つべき時が来た！ ほうはいたる世界□□（革命と読め——筆者）の潮流におどりこめ。時代の波は必ずや諸君を成功の彼岸に送りどけずにはいまい。

その時こそ『緑の星』はどんなに笑ましげに、諸君の上に輝いてみえることだろう。』

この文章を山口は一九二二年四月の *Verda Ombro*（『緑の影』）に書いたのだが、この台北で発行されていた台湾エスベラント学会の機関誌の編集者、連温卿は、その二分の一近くを伏字にしなければならなかった。これが植民地での緑化運動の実体であった。全文が完全に、いや若干の伏字を残して復原発表されたのは、山口の死後、一九二三年六月十日発行の『匈牙利の労働革命』<sup>(21)</sup>である。こ

の原稿が、その他の山口の遺文とともに、無事に水曜会の手に移り、堺利彦・山川夫妻・河崎なつ・貝原たい・林てる・連温卿などの山口回想文をあわせて一冊のパンフレットになることができたのは、実に山川菊栄と連温卿の力に負うところである。

連の名をこころした種類の文章に出すことはどうかという蔣政権への顧慮から、菊栄の旧版『女二代の記』<sup>(22)</sup>などにならって、比嘉春潮の『沖繩の歳月』<sup>(23)</sup>などと同様、筆者も今まで控えていたのであ



山口小静

るが、すでに故人になったことでもあるので、はばかりでもないであろう。

『解放のいしずえ』旧版<sup>(23)</sup>は山口のことを次のように書いている。

山口小静 一九〇〇——一九二三

台湾北白川神社の宮司の娘として生まる。奈良女子高等師範学校を卒業、上京して水曜会に参加、山川菊栄の指導を受け、婦人解放運動に入ったが、病弱のため台湾に帰る。一九二二（大正十一年）ロシア飢饉救済運動を同志と共におこして成功し、台湾における解放運動に多く寄与したが、翌二三年病死した。享年二十四、遺族 不明。

この簡潔な記事は、この本の多くの部分と同じように相当不正確であるから、前記のパンフレットおよび菊栄の『女二代の記』から補ってみよう。

山口の父、透は漢学者。新聞記者として日清戦争に従軍、北白川宮能久親王に従って「台湾征討」に行き、この地で病死した北白川宮を祭る台湾神社の神官となった。「台湾神社史」という小冊子を作っている。祖父も漢学者で、台湾の諸学校で倫理を教え、母は有名な国学者の子と云われている。長兄も神官、次兄は東京帝大法学部を卒業して、反動的憲法学者上杉慎吉の熱心な崇拜者であった由。

山口さん、あなたから二年ほど前にこんな話を聞いたことがあります。

私が十ぐらいのことでしたかしら、何でもおちごまげに結っていたようでしたから。今から思うと、それはちょうどかの大逆事件の時だったので。食後の談話がその事におよんで、終わりに父は、「まったく不届な人たちだ。お前たちはどう思うか」ときいたのです。そこには母と私がいいたよ

うでした。母はもちろん、「おことばのとおりでございます」と言ったのですが、私はなぜかその人たちが大変いけなないように思えなかつたので、「私はそれほどには思いません」——とか何とか言ったのです。父は烈火のように怒りました。

母は私を奥座敷へ連れて行ってお床の前にすわらせ、「お前はなぜそんな大それたことを言っておくれたのです。二度とああいう口をきかないでくれ」と涙ながらに言うのですが、どうしても私は思い直せないで、黙っていると、母は、また、「あんな大それた事をいう娘を生んだのは私の恥です。お父さまにもすみません。お国にもすみません。神社の宮様にもすみません。で、私はお前を刺し殺し私も切腹して申訳をせねばなりません」と涙をはらはらこぼしてジッと私を見つめました。いい加減なことは決して言わぬ母だとは知っていましたが、私はやはり黙って母を見上げました。と、ほほを伝う母の涙を見ると、何ということなしに心の底があつくなくて、眼頭がぼっとしてきました。そしてとうとうワッと大声に泣きました。母は黙っていました……。

これは、山口を社会主義にみちびき、また佐々城松栄に影響されて自らもエスペラントを学び、一時期日本エスペラント学会の理事をも勤めた東京女高師教授で、戦後は日本母親大会連絡会の責任者であった河崎なつが語る愛弟子の回想の一コマである。

一九一八年の秋ごろから、同じ東京女高師の学生で、のちの林要夫人の永倉てる、のちの西雅雄夫人の貝原たいとともに、山口は山川均の家に入し、その指導を受けるようになった。河崎なつが山川にその愛弟子たちを委託したのであった。社会主義研究グループ、水曜会の創立会員のひとりとし

て、この章の冒頭にひいた徳田球一の予審調書で、山口梅子となっているのは、例のトッキュー式早のみこみで、本名と筆名をチャンボンにしたのである。そして肺結核におかされて台湾へ帰るまで、社会主義の研究に従事した。水曜会の例会のもっとも熱心な参加者であった山口は、一三三日で倒れたハンガリー・ソヴェート共和国を均の指導で研究して、それを水曜会の例会で報告し、一九二二年三月の雑誌『社会主義研究』に吉田梅子の名で発表した。

台湾では、病気の好転の合い間に近所の女学校に勤める一方、ひそかに台北の急進分子を集めてマルクス研究会を組織した。台湾文化協会や、その外郭団体でもあるところの台湾エスペラント学会に結集した連温卿や蘇璧輝など、主として中国系の台湾人が山口の同志であった。

一九二二年五月二十二日、雑誌『前衛』は号外を出して「飢えたるロシアを救えー」と呼びかけた。社会思想団体と労農団体、『種蒔く人』に集まった文化人たちも立ち上がった。読売新聞社・朝日新聞社・改造社・文芸春秋社なども動いた。三浦環はそのために帝劇のステージで歌った。「君死にたまふことなかれ」とかつて歌った与謝野晶子や深尾須磨子らも救援活動に参加した。この年の七月、ひそかに結成された日本共産党の学生対策の中心になっていた田所輝明が、いつのまにかこの運動の中心になっていた。あらゆる自由主義者が、この運動が「労農ロシア承認運動の側面的活動」であることを知ってか知らずか、共産党の呼びかけに応じた。それは松川事件や白鳥事件に比べてみて、当時の党の力の絶対的弱さを考えに入れなくとも、決してそれに劣らない大規模のものになった。

しかし東京で開かれた第一〇回日本エスペラント大会は、提案者（伊東三郎）不在を口実にして、この運動に参加することを拒否した。そして、わがブルジョアのエスペランチストは、このことによ

って自らを社会と隔離し、エスペラント運動をその創始者の意図に反して、サロン化しようとしたのであった。日本エスペラント運動の数少なくない汚点のひとつである。

一方、台北にあった山口は、直ちにこれに呼応した。台湾文化協会や台湾エスペラント学会は「赤化か緑化か」の中で示されたような困難にもめげず、この運動の発起団体のひとつになり、全島にわたる講演会や音楽会を組織し、新聞雑誌に訴えて、少なからぬ金を送ってきた。そしてロシア飢饉救済会の本部は「今日の何十万円にも相当するであろう金、六、七百万円の義金」をベルリンに本部をおいていた労働者国際飢饉救援委員会の責任者であり、国際共産青年同盟創立者のひとり、のちにスターリンによって粛清されるヴィリー・ミュンツェンブルグの手に送ったのであった。

しかし――

「私は山口小静嬢の死をお知らせ申します。彼女は三月二十七日――彼女の亡き母の九十九日の命日に二十四歳を一期としてこの世を去りました」

連温卿は次の年に、山川菊栄にあてて早くもこう書かねばならなかったのである。

「かれが菊栄さんの英語が上手でとても他人の追従を許さないから、私は一生懸命にエスペラントを勉強して、こんどの雑誌にエス訳を出して菊栄さんの向こうを張ろうとの努力がアアこれも徒勞であった。

四月末までにはなおれると樂觀し予期していたかれは、今や帰らぬ旅に立った。とにかくかれの死は肺炎を併発したためであるらしい。……しかし無意義の死ではなかった。戦場に立って弾丸を供給して殉職したのであった。戦いは正にたけている。強敵を目の前に控えて死せるは不本意に

相違ない。しかし犬死ではなかった。オオ何たる悲壮ぞ！ かが臨終するその日の朝も、万年筆をとった手が書けぬので、『だめだ』と嘆息して絶息したとのこと……」

「私が漢訳の共産党宣言を三、四年前手に入れ、マルクス研究会ができた当時、第一にそれを研究する手筈であったが、内地人もいるから和訳がぜひほしいというので、山口さんから、あなたにお願いしたことがあったでしょう。それからあなたのお返事は今でも官憲がにぎっていると思う。このことから山口さんの父が最後の決心を決めたのだ……昨日のごときも□□□□（撰政の宮——いまの天皇）が□□（行啓）の途中に文化協会の前を通るからと、早朝から家宅大搜索を受け、出入の人は老若男女を問わずいちいち体格検査をやり、おまけに憲兵、正私服巡査百五六十名をもって、その四囲をめぐって警戒している。その前を通る人までも、怪しいと思えばいちいち誰何している……」このパンフレット発行のとき、「A氏」と匿名にされた連温卿の菊栄にあてた手紙である。いささか窮屈な日本語であるが。

「三月二十六日、眠れないといつて医師に注射をしてもらったが、やはり熟眠ができなかった。その夜悪寒をおぼえたので湯タンゴを入れ、一、二時間もすると発熱した。翌朝付添人に昨夜四十分程度ぐらいも熱があったといわれた由。……その夜の九時四十分逝去されたのでした。明晰な頭脳と鉄のごとき意志をもった得がたい同志はこうして死なれたのです。あなたが安否を問う手紙を出された二十八日は、故人がダビにふされる日でありました。遺骨は未だに三枚橋火葬場の納骨堂にあります。葬式もまだです。撰政宮渡台のためだろうと察せられます。故人の母も同病院で、あるいは同病室で昨年十二月二十六日死去されたのです。二十七日付の小静氏の手紙にいわく『昨二十六

日午後四時母永眠。落莫たる心に幾多同志の受難が思われます。今しばらくは生ある者の呻吟をうづねばなりませんね』

十二月下旬、父と衝突したのです。（これも犬が二重証拠をもっている故人の父をせめたからです。）父も小静氏の出京を許し、かつ撰政宮渡台まで各方面と交際しないことにしました。故人がハガキ一枚出さなかったのは、そのためです……」

これはB氏の手紙。連か、それとも他の同志か。山口は、当時の左翼諸雑誌が英語による要約をつけていたのを見て、『前衛』『社会主義研究』『無産階級』などが共産党の方針によって合同して、この二三年の春から出るようになっていて、きわめて短命に終わった党の理論雑誌『赤旗』にエスペラントで要約を付けようと考えたのであった。

満で数えて二十三歳の若さで死んでいった山口は、今考えても惜しい存在であった。生きていたならば——山川四天王につづいて、同じように山川夫妻のもとを去り、やがては獄死する運命が待ちかまえていただけかも知れなかったが。

山口は、サート第二回大会に送られたロマン・ローランの長文のメッセージ「人類解放の武器、エスペラント」を日本語にしている。いまその最後の部分をかかげる。

「しからば要らざる妨害のために遅らせる理由はない。世界語はすでに存在しているのである。それはすでに運動に着手した。しかして今やその運動は全世界にひろげられた。新しい人類は、ミケランゼロのアダムのごとく、目ざめてきた。なかば身を起こして、かれは自己の中に力と欲求とのおそろしい咆哮を意識した。かれらは呼び集められた。かれらは語りあうことを望んでいる。か

れらは今にも語りいでようとしている。かれらをして語らしめよ！ かれらの抑圧せられて制縛せられていた意志をして、自由を求むる叫びを爆発せしめよ！ 数百万の胸をついて詩句より喜悅への神聖なる語を噴出せしめよ！ わが胸に幾百万の人類を抱かしめよ！ わがキスを全世界に投げしめよ！ 兄弟！

(残念ながら印刷の手ちがいのせいか、最後の一句が脱落している。それを補足しよう。「ドイツとフランスの兄弟たちよ、抱きあおう！」)

ついでにつけ加えると、今日でも古本屋の店頭でときに見かける山川菊栄訳のペーベルの『婦人論』の下訳をしたのは、この山口小静であり、同じく山川訳で出たラッパポートの『社会進歩と婦人の地位』の前半は山口、後半はその盟友であり、同じく二十三歳で倒れた林てるの手になるものである。

弔 意

また一つつぼみが落ちた

立ちどまり

ふりかえり

いとおしむ暇もない

われわれの道の歩み

と、わが日本のエスペラント運動の先駆者堺利彦は、この活動的な社会主義者でありエスペランチストであった若い女性の死をいたんだのであった。

「第一次」共産党に加わった他のふたりのエスペランチスト、三田村四郎と小岩井浄については後章にゆずるが、堺と協力して売文社の経営に一時あたって、後に国家社会主義をとなえた高島素之も日本エスペラント協会の会員であった。その高島訳『資本論』にあきたらず、師の河上肇の志をついで全訳をやった長谷部文雄がエスペラントでも高島よりはるかに優れていたことも、ここに書いておく。

注

- 1 『徳田球一予審尋問調書』『現代史資料』第二〇巻 一九六八年 みすず書房版所収。
- 2 『寒村自伝』上巻 一九六五年 筑摩書房、論争社版その他。
- 3 『橋のない川』のモデル木村京太郎さんをたずねる「La Movado 一九七一年四月号」。
- 4 高橋貞樹『特殊部落一千年史』一九二四年 更生閣。復刻版 一九六八年 世界文庫。
- 5 高橋貞樹『日本プロレタリアートの諸問題』一九三一年 希望閣。
- 6 木村京太郎『水乎社運動の思い出』下 一九七三年 部落問題研究所。
- 7 出獄後の島木のこの方面の動向についての断片的記録は、高見順『昭和文学盛衰史』(各社の版あり、ここでは一九六五年講談社版をあげておく)。復刻版『日本共産主義者団関係資料』上巻 一九六八年 同団三十周年記念刊行会。原本は佐藤欽『日本共産主義者団研究』『思想研究』一九三九年 司法省刑事局。もっとくわしいのは、宮内勇『ある時代の手記』一九七三年 河出書房新社。
- 8 山川均『ある凡人の記録』一九五四年 朝日新聞社。同『山川均自伝』一九六一年 岩波書店。
- 9 G. Bruin: Laborista Esperanto-Movado antaŭ la Mondmilito (『世界大戦前の労働者エスペラント運動』) 1936, S.A.F., Paris.
- 10 瀬沼茂樹の詳細な有島武郎研究の中に、佐々城一家の研究があるが、佑への言及は少なかつたように思う。『文学』一九六六年代に連載。

## 第五章 神を殺す人びと



ヒロシゲの像(中村彝 一九二〇年)

- 11 「米国ニ於ケル日本革命<sup>メキシコ</sup>明<sup>メキシコ</sup>党の状況」『明治文化全集』社会編 一九二九年 日本評論社版所収。改版 一九五五年 日本評論新社。
- 12 『本邦社会主義者無政府主義者名簿』『社会主義者無政府主義者人物研究資料一』一九六四年 社会文庫版所収。
- 13 『特別要視察人状勢一斑』第四 発行年代不明 内務省警保局。復刻版 発行年代不明 近代日本史料研究会。
- 14 『米国ニ於ケル日本人社会主義者無政府主義者沿革』一九二一年 内務省警保局(○)。復刻版 一九六四年 柏書房。
- 15 11と同じ。
- 16 13と同じ。
- 17 山川菊栄『女二代の記』一九五六年 日本評論新社。増補版『おんな二代の記』一九七〇年 平凡社。後者には付録として「山口小静さんと思う」を追加。
- 18 同右、平凡社版。
- 19 『佐々城松栄遺稿集』一九三四年 日本エスベラント学会。
- 20 平出禾『プロレタリア文化運動に就ての研究』司法研究報告第二八輯九 一九四〇年 司法省調査部。復刻版 一九六五年 柏書房。
- 21 山口小静述『匈牙利の労働革命』一九三三年 水曜会出版部。このパンフレットに収録されなかった山口の文章「安倍能成氏の平和論」(遺稿)が『種蒔く人』第一九号にのっている。
- 22 比嘉春潮『沖繩の歳月』一九六九年 中央公論社。
- 23 解放運動犠牲者追悼世話人会『解放のいしずえ』一九五六年 同会。
- 24 菊川忠雄『学生社会運動史』一九三二年 中央公論社。増補訂正版 一九四七年 海口書店。なお、この本の本当の筆者が菊川でないことと推定されることを付け加えておく。内容的に言って、菊川の中間派社会民主主義といちじるしく矛盾するからである。本当の筆者は、菊川の後輩の新人会員か、学生出身の日本労働組合同盟関係の左翼の人で、保釈中か執行猶予中に菊川の名を借りたものであろう。